



AUE Monthly



2010年 4月 1日

第 21 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500

目次

- 学内喫煙防止に関する学長宣言
- 行事予定(4月)
- トピックス
 - ・豊橋技術科学大学と単位互換協定締結
 - ・学長らが中国・東北師範大学を訪問
 - ・サークルリーダーシップ研修
 - ・理科実験プレ教員セミナー
 - ・「ドラゴン号」で新聞製作
 - ・大学環境安全協議会研修会
 - ・前期日程合格発表
 - ・環境リサイクル市
 - ・総合演習報告会
 - ・全学FD
 - ・訪問科学実験シンポジウム
- ・教員研修留学生修了式・卒業懇談会
- ・2009年度卒業式
- ・女子バスケット部が教育大初Vを報告
- ・2009年度大学院修了式
- ・退職役職員永年勤続者表彰式
- ・刈谷市と連携包括協定締結
- ・HANDSリニューアルオープン
愛教人インタビュー
- ・浅野和生教授に聞く
お知らせ・報告・投稿
- ・学長が学内「全面禁煙宣言」
- ・6一コース1期生の修士論文抄録集
- ・2教授に日本教育大学協会研究助成
- ・2学生が丹羽奨励生に
- ・井戸准教授からのフィンランド便り

学内喫煙防止に関する学長宣言

松田正久学長は役員部局長会議の協議を経て、4月1日(木)に学内での喫煙防止に関して次のような学長宣言を行いました。本学のHPなどでも公開し、これに対するご意見を募集しています。宣言に関する詳細はHPなどでご確認ください。

学長宣言

愛知教育大学は2011年度からのキャンパス内全面禁煙をめざします

2010年 4月 1日

愛知教育大学長

松田 正久

【愛知教育大学を利用している皆さんへ】

「学長宣言」に対するご意見を受け付けます。

期間：2010年4月1日(木)から4月23日(金)まで

意見提出方法：

電子メール kinen@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 宛にお送りください。

件名は【禁煙意見】としていただき、メール本文(添付ファイル不可)に400字以内でご意見をご記入願います。また、氏名(任意)、性別、所属(職

員の場合は教育職員・事務職員の別、学生の場合は学年、一般の場合には業者・公開講座受講者など本学を利用する立場)を併せてご記入の上、お送りください。

書 面 本学教務課前に設置している意見箱に投函してください。なお、記載内容は、電子メールに準じてご記入をお願いします。

寄せられた意見を安全衛生委員会において集約した上で、2011年度からのキャンパス内全面禁煙実施の体制を検討し、整備します。

【学長としての考え方】

学長としては、本学での4年間で、若い学生の方々が、喫煙の習慣を身につけることに対し、深い危惧の念を抱いています。非喫煙者であった学生諸君が、卒業時に喫煙者になって卒業していくことを防止し、何としても、喫煙率を下げるのが、高等教育機関としての責務であると感じています。このような思いから、「キャンパス内全面禁煙をめざす学長宣言」を出すことにいたしました。多くの大学がキャンパス内全面禁煙に向けて踏み出す中で、本学も禁煙に向けた取り組みが急務だと思います。私は、2008年の全学会議で、院生の一人が発した「なぜ、この大学は全面禁煙にできないんですか？ 今すぐにも実施してください！」という叫びに応えなくてはならないと判断いたしました。

このため、学長としては、本学の喫煙防止対策のワーキングにおける4回の議論の結果を参考に役員部局長会議で協議した結果、「大学として禁煙を推進する」ことをさらに明確にするために、時期を明示することが必要と判断しました。2010年2月25日発表の「受動喫煙防止対策について」と題する厚生労働省健康局長通知（「受動喫煙防止対策の基本的な方向性として、多数の者が利用する公共的な空間については、原則として全面禁煙にすべき」であること）も考慮した結果です。（同通知は、URL:<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000004k3v.html> を参照してください。）

そこで、2011年度から「キャンパス内全面禁煙をめざす」ことを宣言いたします。そのためには喫煙者を減らし新たな喫煙者を生まないようにすることが大事だと考えます。2010年度から、ワーキングで合意された下記の実行計画を実施に移していき、種々の取組を全学的に講じていく必要があると考えています。

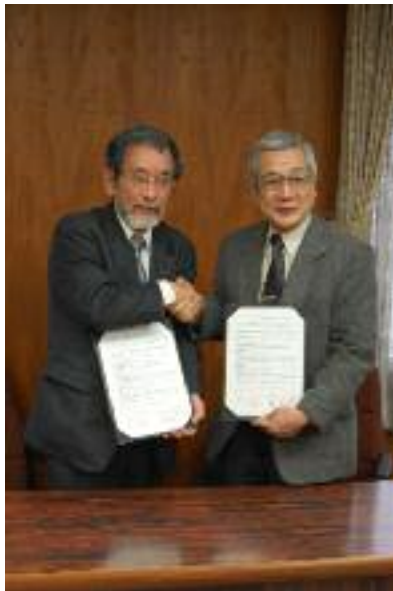
行事予定(4月)

- 1日(木) 役員懇談会(11:00~ 学長室)
- 5日(月) 入学式(10:30~ 講堂)
大学院入学式(18:30~ 第三会議室)
- 6日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 7日(水) 学生支援委員会(13:30~ 第五会議室)
教務企画委員会(13:30~ 第二会議室)
大学改革推進委員会(15:30~ 第五会議室)
- 13日(火) 役員会(13:30~ 学長室)
- 14日(水) 代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 20日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 21日(水) 教員人事委員会(13:30~ 第五会議室)
財務委員会(15:30~ 第五会議室)
- 27日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 28日(水) 教授会(13:30~ 第一会議室)

トピックス

豊橋技術科学大学と単位互換協定締結(3/2)

松田正久本学学長と榊佳之豊橋技術科学大学学長は3月2日(火)午後、豊橋市天伯町の豊橋



技科大で両大学院の単位互換に関する協定書に調印した。本学の大学院教育学研究科と豊橋技科大大学院工学研究科の単位互換で、この協定により、両大学の学生の教育内容充実及び幅広い勉学機会の提供が期待される。

協定書は「両大学大学院に在籍する学生が他方の大学院の授業科目の履修および単位の修得を希望するときは受入大学の学長は教育研究上の支障がない限り、当該学生を受け入れることができる」「受け入れた学生を特別聴講学生として取り扱うものとする」などとし、履修期間は1年以内で、4月1日から実施。

本学は学生が豊橋技科大の「画像工学特論」「認知心理学」「経済システム分析特論」などの科目を受講、教養・専門教育の一層の充実が図られると判断、2009年11月に協定締結を申し入れていた。一方、豊橋技科大は本学で開講している教員免許状取得に必要な教職科目を受講することで良好な人間関係の構築に資すると判断した。

係の構築に資すると判断した。

調印式では榊学長が「大学はミッションを明快にしながらお互いに協力して社会に役割を果たしていく。(今回の調印は)こうした一環としての取り組みです。本学は技術者養成が中心ですが、学生の中には教職に就きたい者もいます。愛教大との協定が学生にとって力を発揮する場になることを期待し、本学の特色の一つとしても発展させていきたい」とあいさつ。松田学長は「本学は教員養成を主軸に教養教育を重視しており、文系と基礎科学が中心ですが、工学系の大学とうまくコラボレーションできればと考えていました。技術者も人であり、人間としての発展、成長は必要で、今回の調印による両大学の友好発展を機に、本学としても知的基盤社会づくりに貢献できればありがたい。大学院の協定がさらに深い形の協調に進んでいけば、と思います」と述べた。

続いて両学長がそれぞれ2通の協定書に署名してがっちりと握手して新しい大学間交流のスタートを印象づけた。

なお、調印式には本学から市橋正一教務企画委員会副委員長、豊橋技科大から木曾祥秋教務委員会副委員長、辻敏明理事・事務局長が同席。学長らは式の後、榊学長室でそれぞれの大学の特徴ある取り組みなどについて懇談、友好を深めた。

学長らが中国・東北師範大学を訪問(3/4~3/7)

3月4日(木)から3月7日(日)の日程で、松田正久学長、日本語教育講座の北野浩章准教授、宮内春菜国際交流室職員、通訳として本学大学院中国人留学生 王娟(Wang Juan)の4名が中国東北部、吉林省長春市にある東北師範大学を表敬訪問した。

東北師範大学とは来る4月7日(水)に国際学术交流協定の締結を控えており、今回の訪問はその事前協議と今後の交流計画についての意見交換を目的としたもの。本学にとって18校目の国際学术交流協定校となる同大学は、国際学术交流



交流を柱の一つに据えた質の高い教育を行い、中国における名門師範大学の一つに数えられている。

協議にあたり、東北師範大学からは、史寧中学長が中国全国人民代表大会出席のため代理の張紹杰副学長をはじめ国際交流担当の教職員計6人が参加。協定案の詳細及び今後の交流の方向性について、協定締結へ向けた両大学の意気込みが感じられる活発な意見が次々と交わされた。特に、短期プログラムによる学生の交流や事務職員の短期実地研修など、多様な交流機会の推進が両大学の共通目標として確認され、そ



の他共同研究の実施やダブルディグリー制の採用についても、順次協力体制を整えていく旨、合意がなされた。

協議終了後は、同大学に留学中の日本人留学生3人と面談し、留學生活について実体験に基づく貴重な情報を得た。その後は学内施設を見学し、本部棟や図書館をはじめ、留学生寮、書籍部等を見学したが、広大なキャンパス内の整った施設の数々に、充実した学生生活の一端を垣間見ることができた。短時間の訪問ではあったものの、交流協定発足後の両大学間の活発な交流を期待できる、大変有意義な訪問となった。

サークルリーダーシップ研修 (3/4)

本学のクラブ・サークル活動を担う学生を対象とした研修「第20回サークルリーダーシップセミナー」が3月4日(木)、大学会館大集会室で開催された。64団体、95人の学生が参加し、はじめに学生支援委員会副委員長の黒川知文教授が「一生を素晴らしいものにしてくれるのがサークル。活動を通して共に喜び共に悲しむ体験をしてほしい」とあいさつ。



午前中はAEDの取り扱いについて研修を実施。インストラクターが「AEDと心肺蘇生について」説明。人工呼吸のポイント指導や実際の機器の使い方の実技講習が人体模型を使って行われ、参加者は熱心に学んでいた。

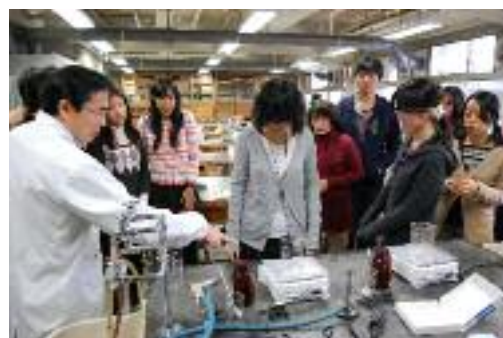
午後からの意見交換会では、学生支援委員会委員から「課外活動団体へのよりよい支援を目指して」と題して、活動団体を統治するクラブ連合体の設立についての提案がなされた。提案理由及び具体的活動内容についての説明が行われた後、体育系団体と文化系団体とに分かれて、設立の是非や問題点に関して活発な意見交換を行った。



最後の意見発表会では、両団体の代表者から、ともに設立に向けて前向きに取り組みたいとの考えが発表された。

理科実験プレ教員セミナー (3/8~3/11)

教員になる本学学生の理科指導に関する不安を解消するための「理科実験プレ教員セミナー」が3月8日(月)~11日(木)の4日間、自然科学棟で開催された。教員の理科離れが深刻な問題としてクローズアップされる中、理科を専門としない文系学生も理解できるよう工夫されたセミナーで、学生約20人が受講した。



4日間とも午後1時から3時間程度で、実験講座の内容は「物理」(8日、電流の働き、電気の利用)、「化学」(9日、化学薬品と実験器具の取扱い方法)、「生物」(10日、昆虫とメダカの飼育・観察法)、「地学」(11日、月の満ち欠け)。それぞれ8日から順に岩山勉教授、稲毛正彦教授、澤正実教授、澤武文教授が担当。

化学実験講座では、鉄の化合物の合成に関する実験を実施。「目に入ったら危険です」と稲毛教授が28%のアンモニア水を希釈する際の注意事項を説明。ピペット、ビーカーのほか、孔のある器を取り付けた吸入瓶から空気を抜きながら濾過する器具などを使って2人一組で実験を開始。攪拌して液体の色が変わると、教授が板書した複雑な化学式を示して「今起きている反応は化学式の通りです」と話すと、目を丸くして苦笑いする学生もいた。それでも、真剣な表情でメモを取り、無事実験が終了すると、ほっとした表情を見せていた。地学では澤教授が壁に星座



の図を貼った暗室で地球から星座を見る位置などを体験する学習を行い、天文台へ移動して望遠鏡で金星を観察した。

受講した学生のほとんどが「参加してよかった」と理科実験を体験できるユニークなセミナーを評価した。文系の4年生はそれぞれ、教員としての確かな手応えを感じた様子だった。

学校講師内定の男性は「実験は中学生以来。扱う時の注意事項などを理解できただけでありがたい。物理も興味深かったし、本当に有意義でした」。

講師内定の別の男性も「もともと理科が苦手でしたが、4日間受講していろいろな発見がありました。小学校ではクラス担任の可能性もあるといわれており、受講しなかったら戸惑ったと思う。理科の奥深さがわかったのは収穫。これから勉強する動機付けにもなりました」と成果を強調。

小学校教諭になる女性は「物理で体験したコンデンサー、発行ダイオードが小学校で習うと聞いて自分が小学生の時との違いを認識しました。もともと理科は好きでしたが、好きなことと教えることは違うことも実感しました。天文台は初めて中に入り、感動しました。将来は印象的な実験もしてみたい。そのヒントをもらいました」と笑顔で話した。別の小学校教諭内定の女性も「実験は好きですが、やり方、注意点を学び、教える参考になりました。物理、地学は中学までの知識しかなく、勉強になりました。受講する前に比べて（教師になる）自信がついたのは事実ですね」と、セミナー効果を実感していた。

「ドラゴン号」で新聞制作(3/8)

新聞印刷の実演のため、各地を巡回している中日新聞のマイクロバス「ドラゴン号」が3月8日（月）、本学にやって来た。教員のための新聞学習を「総合演習」に採り入れている美術選修・専攻3年生の最終レポートは、個人新聞を発行すること。この半年間、中日新聞社との連携授業として学生たちはテーマ設定、取材、写真撮影、記事の書き方、見出し、レイアウトなどをプロから伝授。この日は各自が四苦八苦しながらも作成してきた新聞原稿データを「ドラゴン号」でA3判の新聞としてカラー印刷、瞬く間に約30種類の新紙が発行された。学生は刷り上がったばかりの世界に一つしかない手作りの「自分の新聞」を手にして笑顔でカメラに収まるなど満足気だった。



新聞活用学習を積極的に進める中日新聞社は、要請があれば学校現場に「ドラゴン号」を派遣している。学生が新聞制作の難しさ、楽しさを体験することは生活に不可欠な情報の受け渡しの訓練にもなり、引いては次世代に情報の大切さを伝えていくきっかけになる。同社は未来の先生たちの利用を歓迎している。

大学環境安全協議会研修会(3/9)



本学の水質汚濁防止検討委員会が団体会員として登録している大学等環境安全協議会の「第2回実務者連絡会技術研修会」が3月9日（火）、名古屋市の名古屋工業大学2号館で開催された。研修会は同協議会実務者連絡会で安全衛生部門長を務める本学の保健環境センター榊原洋子講師が中心となって企画され、保健環境センター久永直見教授による特別講演もあった。

名古屋工業大学総括安全衛生管理者である後藤俊幸副学長が大学における労働安全衛生の重要性と技術研修会への期待の言葉を述べた。次いで部門長の榊原講師が大学における労働安全衛生実務者の担う役割と課題、および技術研修会の目的について説明した。

第1部は2件の特別講演で、名古屋工業大学保健センター中野功准教授が安衛法の中心的概念である安全配慮義務および健康診断の盲点について、本学の久永教授が安全衛生実務者に必要な有害物による健康障害の知識について、産業医学研究の具体的な事例を交えて講演した。

第2部では、作業環境管理に欠かせない局所排気装置の点検と修理、作業環境測定士から見た実験室の改善提案、実験系廃棄物を適切に回収・管理への取り組み、ヒヤリハット報告の取り組みと改善に向けた課題などの事例提供があり、多くの大学に共通する課題や先行事例を学び合った。

第3部では、座長である榊原講師より、総合討論の話題として最近の労働安全トピックスや昨年11月大環協研修会までに提起されている課題7件が列挙され、参加者の挙手により選ばれた「事故事例・ヒヤリハット事例の分析手法」と「実務者の知識・技術の伝承問題」の2件のテーマを集中議論した。事故事例の分析手法は、座長が複数の大学の事故等報告書様式の整理作業結果を示した。各大学の事例報告における詳しい状況や、問題点、要望等について会場内から多数の意見が出された。その結果、事故再発防止のための提案や予防的な改善提案を行う「実務者」の技術向上のためには、事例を集めて、共有し、原因分析をするトレーニングが必要であることが確認され、大学間で連携し、事故・ヒヤリハット事例の収集・共有・分析・トレーニングに関するプロジェクト提案もあった。

技術研修会のあと、名工大安全管理室、作業環境測定分析室、廃棄物集積所、化学物質管理室などの見学会があり、効率的な化学物質に関する環境・安全・衛生教育に関する組織的管理支援のあり方を考える上で貴重な機会になった。年度末の多忙な時期だったが、全国17の大学等教育研究機関、約50名が参加した大変充実した研修会だった。

前期日程合格発表(3/10)

本学前期日程の合格発表が3月10日(水)午後1時から講堂で行われた。講堂内ロビーに合格者629人の番号が2つのホワイトボードに貼り出されると、受験生や保護者らが一斉に詰め掛けて、自分や子どもの番号を探した。番号が見つかった、「わあ、あった」「やった」などの声が飛び交い、受験生は飛び跳ねて体で喜びを表現、中には番号を見つけて感激の余り涙ぐむ女子高校生もいた。ボードの周囲は携帯電話のカメラで番号を撮影する人で溢れ、それぞれ合格通知書の交付を受け、入学手続き要項などの資料を受け取っていた。



朝までに雨が上がったものの時折、強い風が吹く中、講堂を出た合格者は「祝合格」と書かれたパネル前で記念写真を撮影。同時にユニフォームを着た在学生らからクラブ・サークルの勧誘の洗礼を受けて、チラシを抱え込むようにして笑顔で答え、男性合格者は野球部員から胸上げをされて、感激を全身で味わっていた。

また、後期日程の試験は3月12日(金)に実施され、3月24日(水)午前11時から合格発表が行われた。



環境リサイクル市(3/10)

前期日程の合格発表に合わせた恒例の「環境リサイクル市」が3月10日(水)、黄色い幟がはためく中、講堂前広場で開催された。

合格は大学のHPでも確認できるため本学まで直接確認に来る人は、少なめだったが、ラグビー部員らが頑張って呼び込みを行い、販売とも順調だった。今回は4回目ということもあり、職員の間でも認知度が高まり、業務の合間に会場を覗いて売り上げに協力する人もいた。



出展総数は230点余あり、うち111点を販売。売上金

は今回大物が少なかったこともあり、昨年を下回る約5000円だったが、担当者は「金額の多少にかかわらず開催することが重要だと思います。収益は昨年同様、環境活動に活用する予定です」と話していた。



総合演習報告会(3/10)

本学社会専攻3年生による「総合演習」報告会が3月10日(水)、第一人文棟で開催された。市民参加型教員養成の一環で、学外者の協力を得て、学生自身が考え、体験する演習。この日は学外コーディネーターで学生を支えた魚住忠久東郷町国際交流協会名誉会長(本学名誉教授)、森久晃名古屋市教育委員会学校教育指導室主任指導主事、田中健知立市小中学校PTA連絡協議会顧問の3人も出席して、学生の発表に聞き入った。学生は数人ずつのチームで半年かけて活動してきた内容、成果を順次報告した。「映像を使った情報発信」「東郷町と東京インドネシア学校との子どもの国際交流」「環境問題を考えよう～安城まちづくり市民会議に参加して」「外国人児童向け自主教材を使った授業を作る」や「大あんまき(知立名物)の秘密」などユニークで意義深いテーマの報告が続いた。



竹の炭焼きを体験した学生は「消臭効果を確かめるため、自分の靴の中に竹炭を入れておいた。少しにおいが減ったように感じた。炭を入れた黒い“タイ焼きアイス”を紹介します。おいしかったです」などとユーモアたっぷりに話し、笑い声に包まれた。

魚住氏が「過去にとらわれない企画力、創造性に感心した。興味を失わないでほしい。発表内容もよくなり、学外の協力者からの信頼も厚くなっている」と学生を激励。森氏は「授業は(児童・生徒に)印象に残るような仕掛けが必要。演習ではいろいろな方と関わり人とのつながりを図ったと思います。半年間頑張ったことを今後に生かしていただきたい」、田中氏は「授業の教材を自分たちで作るのは正解がなく、自分で探すプロセスに意味がある。考える力を生かしてください」とそれぞれ感想を述べた。最後に担当の土屋武志教授が「自分たちで地域、企業の人たちと協働、チームで活動したことは意義がある。皆さんが今回の経験から学び、やがて後輩の力になろうと考える、いい循環が出てくると思う。頑張った点をきちんと自己評価してほしい」と締めくくった。

全学FD(3/11)

「学士課程 Faculty Development ～学生の学修向上のための授業改善と今後の全学FDの在り方～」が3月11日(木)、第五会議室で開催された。2月22日の(月)のチップス集をもとにした授業改善に続く授業改善推進の全学FDで、今回は特に同一授業科目名の授業、複数教員担当の授業(共通科目と専門教育科目)について、担当教員間でどう協働的に取り組むべきかを課題として意見交換がなされた。併せて今後のFDのあり方についての提言も行われた。



今回のFDに先だって、昨年12月中旬にそれぞれの科目の担当教員グループに依頼された、昨年度の学業成績による担当クラスごとのGPA (Grade Point Average) 分布、GPC (Grade Point Class Average) のデータも参考資料として提供された。それぞれの担当科目の授業目標と成績評価について共有すべき点の確認や授業改善の取り組みについて話し合いが行われ、各担当グループから寄せられた報告を集約・分析し、それを踏まえての全学FDとなった。

はじめに佐藤洋一教育担当理事が開催のあいさつに続いて、本年度前期の「自己評価書」(教員対象のアンケート)から授業改善の典型的事例を紹介。「授業評価」結果(学生対象のアンケート)は4年前のものと比較し、教員側の改善工夫の進みがみられること、学生側の受動的学習傾向と多様化(2極化)が進行していることを指摘した。また、誰もが求めている「役に立つ」FDとするため、多くの学生の参画も念頭に計画的に取り組んでいくことの重要性を強調した。その後、大学教育・教員養成開発センターFD・学習支援部門太田弘一兼担当教員より、教育目標と成績評価について、事前配布資料に基づいて、各教育単位FDの状況が紹介され、教育目標と成績評価については、大半の教育単位で共通理解と何らかの合意に向け努力がされていると本学の全体的状況が示された。次に、生活科教育、数学科教育などの各教員がそれぞれ具体的な取り組み例を紹介した。

最後のテーマは今後のFDの在り方で同センター同部門の大澤秀介兼担当教員から、報告で出されたFDに関する要望や全国レベルで取り組みが盛り上がっている「学生FDサミット」への参加経験を踏まえて、以下のような大胆な提言が紹介された。

学生・職員参加型FDを行う。ボランティアの学生・教職員教育改善委員会を立ち上げ、「愛教大 CoNandE (こなんんで) 委員会」[Committee of Non-obligation and Edutainment (義務でなく教育を楽しむ委員会)]と呼び、そのスタッフ(委員)は「あいこねスタッフ」と呼ぶ。

楽しむFDを行う。教員間で日常的に話し合えるコミュニティの復活。学生・教員によるホーム・パーティー式ワークショップや「あいこねスタッフ」が企画するコンテスト(Best Teachers 賞・Best シラバス賞など)、教職員しゃべり場(食事・喫茶・談話室)等の企画を立ち上げる。

楽しむFDのキーワードは、Food & Drink!

最後に佐藤理事が提起された非常勤講師を含めて話し合えるため学外者用旅費の支給、役に立つFD・楽しいコミュニティ型FD、本学憲章に謳われている学生参画型のFD・SDなどについては、是非実現できるよう方策を早く示すよう準備し、2010年度の授業改善の取り組みを推進したい旨のまとめの言葉があり、充実した会議を終了した。

訪問科学実験シンポジウム(3/13)

「訪問科学実験シンポジウム」が3月13日(土)、本学第五会議室で開催された。実験は本学学生が自主的に、依頼を受けた小中学校などへ出向き、子どもと一緒に科学実験を楽しむもの。この日は学生、実験実施校の教員を含む約50人が出席し、2009年度の活動報告のほか、新しい実験も披露され、参加者は活動の意義を再確認していた。



松田正久学長が「訪問科学実験は本学の発信力、存在感を高めていく一つの柱。外国人学習支援とともに、ものづくりの中心でもあるこの地域の大学としての最も特徴ある取り組みだと思う。これからもご協力、ご支援をお願いしたい」とあいさつ。09年度学生執行部代表の浦田彩乃さんが29回訪問実験を行った実績とともに「どうしたらうまく説明できるか、授業だけではわか

らないこともこの活動で多く学びました。さらに発展させていきたい」と述べた。また、実験実践先アンケート結果を示して、子どもの実験への反応などを紹介、「考える楽しさ、わかる楽しさが味わえる教材の工夫が必要」「家庭で実験を行う際の注意点など安全面での徹底が必要」など課題も指摘した。



続いて、コーナーに並べられた新しい実験教材を学生らが説明。教材はタマネギのDNAを抽出する「生命の設計図DNA」、わっぱ、紙ブーメランなどを作る「飛ぶ工作」、共振、液状化現象を学ぶ「地震」などで、教員らは「これは小学生には難しいのでは」「もう少し柔らかい材料を使ってみては」と学生にアドバイスしていた。

この後、岡崎、刈谷、尾張旭各市の小学校教員から話題提供があり、それぞれ「子どもたちのできた喜びは大きかった」「楽しんだが、もっと時間の余裕があればよかった」「大学、地域の発展にとってもいい活動」などの報告が行われた。また東栄町の先生は「子どもたちが科学に触れる場を探したが、東栄町は遠く、拒否されてきた。愛教大の学生さんに来てもらい、本当に助かりました。おかげで子どもたちは素晴らしい体験ができました。2010年度もお願いするように上司に言われて来ました」と活動を高く評価した。

最後に新年度の学生執行部代表を務める松本龍之介さんが「実験が子どもたちの驚きにつながる教材を考えていきたい。学生も頑張るので、よろしくお願いします」と決意を述べた。

教員研修留学生修了式・卒業懇談会(3/15)

2009年度の教員研修留学生の修了証書授与式が3月15日(月)午後4時半から第3会議室で行われた。対象者はインドネシア、ミャンマー、メキシコの教師4名で、松田正久学長、村松常理事ら本学関係者が出席。松田学長から修了証書を受け取った。修了生代表のプラボ モラレスブリサさんは、「日本の社会での、互いに尊重し合う姿や向上心、粘り強さ、規則正しさ、チームワークはすばらしいと思います。日本での生活を終えることができ、幸せに感じます」とお礼を述べた。



また、この日午後5時半からは大学会館の国際交流センター1階ロビーで、2009年度外国人留学生卒業・修了懇談会が開催された。留学生と交流している刈谷市国際交流協会、知立市国際交流協会、愛知県、アイシン精機株式会社、近隣宿舍家主を来賓として招き、約130人が参加。日本文化紹介として茶道部による抹茶と茶菓子の試食や、本学音楽専攻の学生・教員による歌もあり、留学生の卒業・修了を盛大に祝った。

2009年度卒業式(3/23)

「平成21(2009)年度卒業式」が3月23日(火)、講堂で卒業生、保護者、来賓、本学関係者ら約1400人が出席して挙行された。

この日巣立った卒業生、修了生は計1102人。山本良夫総務課長の司会で開会。学位記、修了証の授与では松田正久学長が初等教育教員養成課程から各課程の卒業生代表と大学院修了生代表に学位記、修了証を手渡した。代表の中には映画「マイ・フェア・レディ」を彷彿とさせる白いロングドレスで登場した女性や角帽姿の男性もいて、会場から大きな歓声があがった場面もあ

った。

告辞で学長は「心より卒業・修了のお祝いを申し上げます」と祝意を示した後、初めて修了生を出した教職大学院や厳しい経済状況下での卒業生の就職事情などに触れ「現実から目をそらさず、『知の力』で世界を見据えてほしい。教員になれる人は子どもたちと真摯に向き合い、あなた方の夢を伝えてほしい。企業や公務員として歩まれる方も本学で培われた教養教育や専門の学びを土台に自ら鍛え、その道のエキスパートを目指すことを期待します。みなさんの活躍が本学はじめ日本、世界の今後を支える大きな力になるものと確信しています」と期待の言葉を贈った。



教育学部を代表して中等教育教員養成課程（理科専攻）の後藤智子さんは「愛教大で得た経験や出会いはかけがえのないもの。これからの道は平坦ではないが、経験を生かして社会に貢献していきたい」と決意を語り、大学院修了生代表も本学での学びの意義を込めてそれぞれの思いを述べた。



本学経営協議会委員、名誉教授ら来賓の紹介に続いて本学の中田直宏名誉教授指揮、管弦楽団の演奏によるワーグナーの曲が披露され、最後に「蛍の光」を全員で合唱して式を終えた。

女子バスケット部が教育大学初Vを報告(3/25)

第50回全国教育系10大学バスケットボール競技大会（豊橋市、3/13～3/17）で優勝した本学の女子バスケットボール部の部員が3月25日（木）、松田正久学長に初優勝を報告した。部長の森勇示教授とともに学長室を訪れた部員は優勝カップなどを持参して報告。学長が50年で初めての快挙を讃えると、各部員は笑顔で応え、優秀選手賞も手にした学生は「来年も頑張ります」と連覇への決意を語っていた。



森部長は「50年の歴史の中で愛知教育大学女子バスケットボール部として初の栄誉を勝ち取ることができました。部員一同大きな喜びとともに自信を得ることができたと思います。バスケットボールは努力が結果に直結するスポーツですので、愛教大の武器、真面目さを全面に出せたと感じています。また、部員たちの日ごろの努力もさることながら、大会に際し支援していただいた関係者の皆様、OB・OGの皆様がこの場を借りて感謝の意を表します」とコメントした。

2009年度大学院修了式(3/25)



2009年度大学院修了証書授与式が3月25日（木）午後6時半から第五会議室で開催された。教育学研究科（修了生113人）の4人と教育実践研究科（教職大学院）の15人合わせて19人が出席、松田正久学長から1人ひとりに修了証書が手渡された。教職大学院はこの日が第一期生の修了式となり、学部からの直進者3人を含む初の教職修士18人が誕生した。

あいさつに立った松田正久学長は「皆さんの修了をお祝いします。教職大学院では学校に勤めながら大学院での研究をやり遂げたことに敬意を表

し、スクールリーダーとして歩まれることを期待しています。大学と現場をつなぐ架け橋としてご精進をお願いしたい」と激励した。教育学研究科を代表して土井美恵子さんが「学ぶ機会を与えていただいたことに感謝します」と述べ、教職大学院を代表して山口和生さんが「第一期生として仲間と刺激的で楽しい学びができたと思う。先生方に支えていただき得難い学習をしたが、修了は新たなスタート。大学院制度を裏切ることなく、後に続く皆さんの道標になりたい」と力強い決意を表明した。

式には伊藤雅朗愛知県教育委員会義務教育課課長補佐，安藤誠同県総合教育センター研修部長が来賓として出席した。

退職役職員永年勤続者表彰式(3/25)

退職役職員永年勤続者表彰式が3月25日(木)，第五会議室で行われた。対象者は10人で，式には8人が出席し，松田正久学長が1人ひとりに感謝状と記念品を手渡した。学長は「長年，大学のために尽力いただいたことに感謝申します。リフレッシュしていただき，今後も側面からご支援をお願いしたい」とあいさつ。野村和雄教授(養護教育)が被表彰者を代表して「長年勤めることができたのは皆さんのおかげ。ありがとうございました」とお礼を述べた。



この後，退職者らは学長，役員，学長補佐らと記念写真を撮影して式を終えた。

刈谷市と連携包括協定締結(3/26)



本学は3月26日(金)，刈谷市と連携協力に関する包括協定を締結した。これまで教育や商店街活性化については協定を結んで連携してきたが，大学と自治体の包括協定は双方にとってこれが初めて。

協定締結式は刈谷市役所庁議室で行われ，松田正久学長と竹中良則市長が出席。学長，市長は目的を「包括的な連携の下，教育研究，生涯学習，文化，スポーツ，ものづくり，まちづくり等の分野において相互に効力し，地域社会の発展と人材育成に寄与する」とする協定書に署名して交換した。竹中市長は「これまでも各分野で連携してきたが，大学が刈谷市に来て40周年の節目の年の新しいスタートを喜んでいきます。人的交流などさらに連携を深めていきたい」とあいさつ。松田学長も「大学の役割の一つは“知の貢献”で，地域への貢献があります。今回の協定締結で両者が一体的に発展していきやすくなりました。さまざまな取り組みを通して協力し，関係を深めていければと思います」と述べた。

今後は双方に窓口の設置を確認して，連絡調整をしながら各分野での具体的な取り組み，活動を決定，実行して協定効果を高めていく方針。

協定締結式には本学側は横地正喜理事(連携担当)，富岡逸郎事務局長，市側は岡田義和，大畠誠司の両副市長，太田武司教育長がそれぞれ同席した。



HANDSリニューアルオープン(3/29)

本学の第一福利施設の食堂「HANDS」が3月29日(月)午前11時半，リニューアルオー



ブシした。これを前に、生協の白取義之専務理事が松田正久学長、折出健二理事ら本学役員、職員らを前にリニューアルのポイントを説明。菅沼教生理事長が「生協だけが安くて便利だった昔と違い、経営的にも厳しいが、座席を工夫するなどして学生のニーズに応えられるように設計した。今後とも利用、ご協力をお願いしたい」とあいさつした。

改装は壁面、天井を明るく塗り替え、いす、テーブルなどを新調したほか、用途別にゾーニング

して、カラフルないすを配したランチゾーン 163 席、1、2 人でも利用しやすいカウンター式のプライベートゾーン 80 席と奥には 144 席をパーティションで区切ることもできるパーティーゾーンを設置。改装前に比べて、席数がやや減少した分、フロアのスペースに余裕があるため、利用状況を見ながら数十席増やすことも可能という。煮魚、フライや野菜、豆腐などホットな惣菜コーナーが新設され、好みに合わせて選択できるようになった。

開店と同時に多くの学生が一斉に入店し、思い思いのランチを楽しんだ。女子学生は「うわー、めっちゃきれい」と歓声を上げ、男子学生は「プライベートゾーンは利用しやすくていいですね。惣菜コーナーなどの重さで料金が決まるので混雑しそう」などと感想を漏らしていた。

愛教人インタビュー

浅野和生教授に聞く



本学の浅野和生教授（美術教育）が監修した英文学術書「The Island of St. Nicholas」がこのほど発刊された。1990 年からトルコの地中海沿岸にあるゲミレル島周辺のビザンティン遺跡の発掘・調査を続け、調査団の団長を務めた教授が研究者仲間とともに進めた 20 年にも及ぶ調査・研究の成果をまとめた大著。6 世紀の教会が発掘対象だったが、書名にある聖・ニコラオスはクリスマスに登場するサンタクロースのモデルとなった実在の人物で、この教会から数十^キ離れたところで誕生したという。鮮やかなモザイク画、地中海の島に漂う歴史

と文化の薫り……謎とロマン溢れる研究の成果などを浅野教授に聞いた。

本書の概要を。

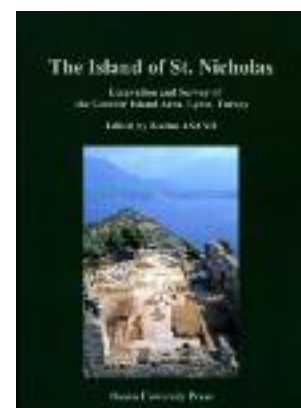
「1990 年からゲミレル島周辺を調査、恩師の跡を継いだ私は 95 年から調査団長を務め、益田朋幸早稲田大教授、福永伸哉大阪大教授、中谷功治関西学院大教授らと研究を続けてきました。発掘調査とその後の比較研究など成果をまとめて発表した日本語、英語の論文などの集大成が本書といえます」

延べ 130 人による 20 年がかりの調査ですね。始めた経緯は。

「西洋美術史を専攻し、中世の教会建築の現地調査をしたいと考えていたところ、科学研究費補助金がつき、通算 9 年の調査を行いました。その後、個人的にも調査し、成果が出るに従って運命に導かれるように研究を続けてきたといえるかもしれません」

6 世紀の教会跡がよく残っていましたね。

「古い教会ですね。現在残っている他の教会は内部が改修されているので、元の形が不明ですが、われわれが調査した教会は 6 世紀に建てられ、7 世紀に壊された状態が生々しく残っていました。このため 6 世紀の教会建築がどのようなものかよくわかりました。人が住みやすいと遺跡の上に町ができたりしますが、この教会は山の頂きにあり、



人が住んで改変することなかったため、ほとんど手つかずの状態が残っていました」

発掘、研究の成果は。

「床の約 200 平方メートルに描かれたモザイク画が見つかりました。予想はしていましたが、これだけきれいな物があるとは思いませんでした。動物や植物の絵ですが、寄進したのがマケドニア人の金細工師だったことや、発掘された遺骨の歯形から血縁関係まで特定できました。墓地、貯水槽なども発見されました。当時、海上交通がかなり盛んで、イスタンブール近くの石切場でほとんど既製品化された石がここまで運ばれて使われていたこともわかりました」

聖ニコラオスはサンタクロースのモデルとか。地中海というより北欧出身のイメージが強いのですが。

「この聖人の生誕地は発掘場所から数十キロ離れたところですよ。付近で司教もしていました。6世紀ごろは聖人信仰が広がっていませんでしたが、9世紀にビザンティン帝国ができ、11、12世紀に西欧へと広がりました。サンタクロースは西欧からの移民がアメリカに渡り、信仰とともに名前が広まったようです。クリスマスプレゼントのサンタキャラクターができあがり、発信元になったのは20世紀のアメリカでした」

今後の研究への抱負と学生へのメッセージを。

「島の一つの教会を発掘しただけです。まだまだ遺跡はあります。当面の課題としては発掘した教会跡に屋根をつけて劣化を防いでモザイク画を公開できたらいいですね。日本からの経済援助でトルコと一緒に進めたい事業です。学生には広い視野を持っているんなことを勉強してほしいですね。発掘といっても英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語などの論文を読まないとな研究が進みません。頑張ってくださいね」

お知らせ・投稿・報告

6年一貫教員養成コース1期生修士論文抄録を発行

6年一貫教員養成コース1期生の修士論文抄録集「6年間の軌跡」（創刊号）が3月に発行された。同コースは2005年度に学部2年生から希望者を募り、翌06年度にスタート。「教育実践研究」などの特色ある授業を提供するとともに4年時に大学院の授業を受けることができるなど学部と大学院が連携したカリキュラムが特色で、教員養成大学・学部として日本で最初の試み。今回、1期生が大学院を修了することになり、抄録集としてまとめた。

これに先立つ2月24日（水）午前、1期生の報告会が大学会館中集会室で行われた。1期生ほか25人が参加し、完成した修士論文について報告が行われた。土屋武志教授（社会科教育）は「後輩から、活発な質疑が行われるなど、内容的には充実したが、6年一貫教育のメリットについての議論は十分でなかった。これを機に今後、実践との関わりの報告も含めて、後輩が成果を積み重ねてほしい」とした。

佐藤洋一理事の話 6年一貫コースは前例のない初めてのコースで、1期生自身は、とりわけ不備な中、4年間試行錯誤し、新たな教育研究システムの確立に向け先導役を見事に果たしたといっても過言ではない。事実、同コースの運営を担う会議に3年目より学生代表が参加し、毎回学習活動報告と同時に抱えた問題を出してもらうなど、まさに本学憲章に謳う学生参画の典型的な例となった。遅ればせながら発表会で判ったこととして、学校の授業など実践的研究活動があったからこそ修論テーマをみつけることができたり、調査研究を行うことができたケースも少なからずあった。どの発表においても、学生諸君（後輩の参加が多い）は強い関心をもって教員に先立って質問やコメントを出していた。専攻の異なる学生同士、その特色を活かした学びのグループがうまく形成できたことを物語っていると直感した。この新たなコース学生のための修論指導の担当教員の労はもとより、4年間学生たちを支え指導を担ってきたコーディネーターに深く感謝するのみです。

2教授に日本教育大学協会研究助成

日本教育大学協会は3月1日（月）までに、平成22年度の研究助成の審査を行い、本学の土屋武志教授（社会科教育）と高橋美由紀教授（外国語教育）の2教授の研究が醸成対象として採

扱された。

研究課題は土屋教授が「6年一貫教員養成のための大学院カリキュラムの開発」で、高橋教授は「教員養成系大学の連携における共通プログラムによる小学校の指導者養成テキスト教材の開発と統一評価の構築」。いずれも研究費は72万円。



土屋教授の話 学部と大学院との連携による6年一貫教員養成の試みは、2005年度から他大学に先駆けて本学が取り組み、今年その一期生を修了させました。この間、先見性が評価される中で教職大学院も設置され、そこへ直進できる体制も整いました。一方、既設大学院の授業充実は依然として大きな課題となっています。メンバーは土屋のほか、各学年の担当者である中野真志教授（生活科教育）、江島徹郎准教授（情報教育）、小塚良孝講師（外国語教育）、真島聖子講師（社会科教育）及び吉岡恒生准教授（障害児教育治療センター）、杉浦淳吉准教授（家政教育）、志水廣教授（教職実践）で、この研究は、現行法の中で可能な大学院での教員養成充実について6年一貫という視点で取り組みます。



高橋教授の話 本研究は、愛知教育大学、大阪教育大学、京都教育大学、岐阜大学教育学部、三重大学教育学部において「英語科教育法」を担当している教員らの連携により、小学校教員養成の在り方として、外国語（英語）活動の指導者の能力を育成するために、学生の英語力の向上、また、英語科教育法の共通カリキュラムや外国語活動（英語教育）における共通テキスト教材の開発、さらに、小学校英語における統一した評価についてのプログラムを構築することを目的としています。また、「教員研修」を実施して、現場の声を集約した内容を「英語科教育法」の指導内容に取り入れることで、大学と教育現場とをつなぐ教育実習を充実させることを目的として研究を行います。研究分担者は吉田晴世大阪教育大学教育学部教授、早瀬光秋三重大学教育学部教授、泉恵美子京都教育大学教育学部准教授、巽徹岐阜大学教育学部准教授です。

2 学生が丹羽奨励生に

本学の2学生が財団法人大幸財団の2009年度の「第19回丹羽奨励生」に選ばれた。地域における学芸文化の向上のため芸術、運動競技などで優れた成果を上げた学生、大学院生らに贈られる賞で、選ばれたのは本学教育学研究科芸術教育専攻修士課程1年の武村和紀さんと教育学部保健体育選修3年の渡邊千洋さん。武村さんは陶芸作品を出品した神戸ピエンナーレ現代陶芸展で最高賞を受賞、渡邊さんは走り幅跳びで全国2位、東海2連覇の活躍を見せた。

今回応募があったのは芸術部門13件、スポーツ部門18件の計31件で、選考委員会はそれぞれ6件、8件の計14件を採択された。武村さん、渡邊さんは20万円を給付された。本部棟では、2人の健闘を讃えて一時、名前が書かれた懸垂幕が掲げられるなどした。

井戸准教授からのフィンランド便り（投稿）

3月28日（日）深夜にサマータイムを迎え、時計の針は1時間進められました。フィンランドの春は新緑が芽生える訳でもなく、気温が上がる訳でもなく、陽の長さで感じるんだ、ということ聞いたことがあります。これでいよいよ春への突入といったところでしょうか。今年のフィンランドは60年振りの大雪とも言われている程本当に毎日良く降り、今でも時々降ることがありますが、それでも確実に春は来ています。あれだけ真っ白だった地面もいつの間にか道路が見えるようになり、残された滑り止めの砂利が靴裏に詰まって仕方がありません。60年振りが確かだとすれば、フィンランド人でさえ殆ど見た事のない雪景色だった訳で、たまたま来ることが叶った私とその年に居合わせたということは大変にラッキーだったと思わざるを得ません。10月から既に雪が降り始めたことを考えると、実に半年間降っていたこととなります。長い冬が終わり、そして一瞬の夏を迎える準備が始まりました。既に陽は夜8時過ぎまで沈みません。この気温と太陽の位置とのギャップが日本ではあり得ないため、私は非常に違和感を持っていますが、人々は嬉々として長い1日を楽しんでいるように見えます。

さて、本日はヘルシンキの住宅事情についてお話したいと思います。首都ヘルシンキは国民の約 10 分の 1 が集中していますが、それでも 50 万人余しか住んでいません。ところが人々は中心地に集中しているため、その住居は決して充分にあるという訳ではなく、学生が利用できるような価格帯の賃貸に至ってはかなりの数が不足しており、多くの留学生の住居が足りていないことが大きな問題となっています。また家賃も最低 400 ユーロ / 月 (5 万円程度) 位からと、名古屋周辺に比べても決して安くはありません。住居が足りていませんから、学生達はほぼ 100% シェアして住むこととなります。HOAS と呼ばれる学生向けのアパートを一括管理している組合が学生 1 人ひとりに割り当てるため、それを受けるからにはどんな場所、環境だろうと受け入れざるを得ない状況になっています。また、400 ユーロ程度のアパートだと良くても居間とキッチンしかありませんから、シェアする学生の 1 人はキッチンに住んでいるという状況です。

このように留学生にとっては非常に厳しい住宅事情ですが、未だにその改善策は見つかっていないようです。



そのような中、私は大学が用意して下さったアパートに住まわせて頂き、またその場所も Eira と呼ばれる高級住宅街にあるため、それを話すと誰もが羨ましがります。とても歴史のある建物で海には歩いて 5 分と掛からず、大変恵まれています。ところがその建物の古さ故か、先日帰宅すると、壁に据え付けられていたラジエーター (暖房器具) が床に落ちていて、大変なことになっていました。恐らく重量 50 キロ以上あるものですから下の階の人はさぞ驚いたことと思います。パイプが曲がって水漏れしてしまっていたので、慌てて受け皿を置きましたが、

週末だったためどこにコンタクトを取ったら良いかも分からず、とにかく色々な友人に連絡して、アパートの下に貼ってあるフィンランド語 (多分メンテナンスなどについて書かれている) の掲示物を写真に撮り、メールで友人に送って英訳してもらい、やっとの思いで夜中の 2 時に 24 時間対応のハウスクエアに連絡することができました。その日は何とか応急処置をしてもらい、翌週、しっかり修理して頂きました。飛んだ災難でしたが、今となってはこれも良い経験だったかも知れません。今後帰国するまでに何事もないことを祈るばかりです。



(井戸 真伸)

編集後記

新年度がスタートしました。フレッシュな 1 年生の姿や新緑がまぶしい季節ですが、本年度は本学が現在の地に統合移転して 40 周年で、国立大学法人化後 7 年目、第二期中期目標・計画の初年度にも当たります。試行的に一般公開されて来ましたが「Monthly」もこれを機に、継続的に公開することになり、新たに「愛教人インタビュー」(掲載随時)も設けました。物事を長持ちさせる秘訣として「新しい酒は新しい革袋に盛れ」という言葉がありますが、新しさの意味をかみしめながら、刻み続ける本学の「新たな歴史」を記録していきたいと思っています。ご愛読、情報のご提供を今後ともよろしくお願いします。(N)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

編集責任者:総務担当理事 折出 健二